

京極読書新聞 <第6号>

発行日 平成21年 9月 1日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

平家物語を愉しむ —その1・琵琶法師と『平家物語』—

湧学館ボランティア 村山 功一 (むらやま・こういち)

そろそろ秋の気配もしますが、まだ夏です。夏といえば“怪談”ですね。怪談といえば『耳なし芳一』(小泉八雲＝ラフカディオ・ハーン)なのだ(それでいいのだ)。

源平壇の浦合戦の古戦場に近い阿弥陀寺に芳一という琵琶法師が住んでいた。ある時、寺の住職が法事で出かけ、芳一は一人縁先で琵琶を弾いていた。そして深夜、足音と、甲冑が擦れ合う音が近づいて来て、芳一の名を呼ぶ。その声は、<自分はさる高貴なお方に仕える者である。その主人がぜひともそなたの琵琶を聴きたいとの仰せだ。ついて参れ>と言う。

不思議に思ったが貴人のお召しなのでついて行くと、やがて広大な御殿と思われる所に案内される。そこで命じられるまま、平家一門の入水の段を語りだすと、周囲からは激しいすすり泣き、嗚咽の音が聞こえた……

ご存知、怪談「耳なし芳一」の冒頭です。

さて、長々と「耳なし芳一」の話をしたのは、皆さんを脅かすためではありません(少しは脅かそうと思っていますが)。主人公芳一が、琵琶法師であったことを述べたかったのです。

琵琶法師は“法師”とはいいますが、“僧侶”ではありません。彼らは琵琶を弾き、物語を語る事を職業とする盲目(視覚障害者)の“芸能人”なのです。そして、社会的弱者である彼らを保護したのが寺院でした。そうした関係から、僧侶の姿をして琵琶を演奏しいろいろな物語を語る芸能者を、琵琶法師と呼ぶようになったのです。

この琵琶法師が最も得意とした演目が『平家物語』でした。琵琶法師はこれを「平曲」または、「平家琵琶」といいました。『平家物語』は、もちろん“怪談”ではありません。平清盛を頂点とし

た平家一門の興亡の歴史を描いた軍記物語です。この物語を琵琶の伴奏にあわせて語ったものが「平曲」です。つまり“弾き語り”です。

琵琶法師たちは、あるときは芳一のように貴人の屋敷に招かれて、またあるときは、ちょうど現在の路上ライブのように大勢の通行人を前にして、平家の物語を語り聴かせました。その結果、文字が読めない多くの一般庶民も、聴きながら泣き、笑い、手に汗を握りつつ『平家物語』を愉しむことができたのです。



『平家物語』は、わが国の古典文学の中で最も幅広く読み継がれ、“国民の文学”といわれています。それは全国各地を巡りながら「平曲」を語り歩いた琵琶法師の活動のたまものだったのです。

<湧学館にある関係図書>

- 『平家物語を読む』
永積安明／著 岩波ジュニア新書 児913ナガ
- 『日本古典のすすめ』
岩波書店編集部／編 岩波ジュニア新書 児910ニホ
- 『日本文学の古典50選』 久保田淳／著 児910クボ
- 『現代語訳日本の古典 10／「平家物語」』
学習研究社 児918ゲン
- 『「平家物語」日本の古典文学』
福田清人／著 偕成社 児918ニホ
- 『平清盛』 加藤秀／著 さ・え・ら書房 児913カト
- 『「平家物語」全訳注(1)～(12)』
杉本圭三郎／訳 講談社学術文庫 B 913.4へイ
- 『平家物語を読む』 川合康／編 吉川弘文館 913.4へイ
- 『平家物語図典』
五味文彦、櫻井陽子／編 小学館 R 913.4へイ
- 『琵琶法師』 兵藤裕己／著 岩波新書 768.3ヒヨ
- 『建礼門院という悲劇』 佐伯真一／著 角川選書 913.4サエ
- 『耳なし芳一が語る平家物語』
中野義人／著 文藝書房 Fナカ



京極読書新聞は
毎月1日発行です。



中学生にこの一冊!

◆ エリック・シュローサー「おいしいハンバーガーのこわい話」

自分のいつも食べているものについて考えたことがありますか？
おいしいからと同じ物、好きな物ばかりを食べたりすると栄養が偏ったり、病気になることもあります。



この本は世界中にお店がある有名なハンバーガーチェーンについて主に書かれていて、世界中どこに行っても同じ味のハンバーガーやフライドポテト、シェイクが食べられるのは何故かや、ハンバーガー用のお肉やポテト用のじゃがいもは何処で作られどう調理されているのかといった事が書かれています。

例えば、甘くておいしいストロベリーシェイクの作り方。本物のいちごは使われず「人工いちご香料」という香料で味付けられていますがその中身は・・・吉草酸アミル・バニリン・アネトール・硝酸エチルなど。そして鶏がチキンナゲットになる過程は。。。

書かれているのはアメリカでの出来事ですが、日本でも同じような事が起きているかもしれません。。。

湧学館 打越 靖子(うちこし・やすこ)

◆ 恩田陸,本多孝好ほか「本からはじまる物語」



「本」「本屋」をテーマにした、短編小説よりも短い“掌編”小説集です。

本が<生息>しているという森では、突然飛び出してきた『おしいれのぼうけん』で頭にこぶを作ったり、遭遇した『ピーターラビット』の群れを興奮しながら捕まえてみたり。ある本屋では『新潮文庫』を並べ替えて、秘密の暗号を作り出す紳士に出会うなど、18人の作家によるバラエティ豊かな18のストーリーが楽しめます。

元は書店向けの広報誌に連載されていたもので、たびたび登場する実在の書名や著者名がわかると物語がより身近に感じられて、思わずニヤリしてしまう場面も…

本と人との出会い・かかわりをきっかけに、本の持つ力強さを感じたりとされる1冊。読書好きな方はもちろん、「本そのもの」が好き！という方にオススメです。

湧学館司書 向出 絵梨香(むこうで・えりか)

啄木文学散歩 ① (函館～札幌)

湧学館司書 新谷保人 (あらや・やすひと)

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花 (函館公園歌碑)

石川啄木は、明治40年5月、ふるさとの岩手県浪民村を出て、津軽海峡を渡ります。函館の文学同人雑誌「紅首蓆(べにまごやし)」の人たちに招かれ、函館での生活再建をはかろうとしたのです。7月には妻・節子と娘の京子を、そして、8月には祖母を呼び寄せ、ここ函館での新しい生活が今まさに始まるようでした。

しかし、そんなささやかな啄木の夢も、8月25日夜半に起こった函館大火で一瞬のうちに砕け散ってしまいます。一家の命に別状はなかったものの、啄木の職場だった弥生尋常小学校も函館

日々新聞社も皆焼けてしまいました。啄木の人生プランは暗転。そして、この日から、私たち道民もよく知っている「啄木の北海道漂泊」が始まったのです。

真夜中の
倶知安駅に下りゆきし
女の鬢の古き痕あと (倶知安駅前歌碑)



函館大火に被災し、札幌での新しい職や住まいを求める人々でごった返す夜行列車。その情景を一瞬でとらえる啄木の目。そして、函館と小樽しか知らなかったはずの啄木の北海道地図が徐々に広がって行く様がまざまざと見てとれます。その第一声が「真夜中の倶知安駅」であったことをもって私たちは誇ってもよいのではないのでしょうか。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

